

富士紀行 (69) 産土の神数多あり！

(H13/5/18 記)

富士山麓もさわやかな季節を迎え、運動や散策をするには絶好の時期である。東海道400年記念須走宿の事業の一環である道標整備が進んでいる。須走交番近く、N T T須走交換所脇には「鎌倉往還」、それを精進川に下っていくと「発電所跡」の道標が新たに建てられている。参考までに、鎌倉往還の道標の向かいの工務店の敷地内には馬頭観音の碑がある。

先日小山町域の地図を眺めていて、神社の多いことに驚かされ、最新版の住宅地図で、確認したところ、地図上では無名である神社11を含めると61の神社が点在している。(名前のある神社は50社である。)小山町は、須走地区、小山地区、竹之下地区等23の地区に区分されているが、それぞれの地区に最小限一つの神社が所在しているのも面白い。地区によっては1社もあれば竹之下や藤曲地区のように無名を除き6社もある地区もある。因みに須走地区は、浅間神社、須走護国神社、伊奈神社の3社である。

生土(いきど)地区の生土神社、一色地区の一色神社、小山地区の小山神社、桑木地区の桑木神社、竹之下地区の嶽之下神社・宮・奥宮、中島地区の中島神社、柳島地区の柳島八幡神社は、地区名を神社名としていることから、明らかに村を霊的な疫災から守護する鎮守神であり、生まれた土地の守護神である産土神でもあり、族縁神としての氏神様でもあろう。産神社という正に産土そのものを意味する神社が棚頭地区にある。

地区によっては2, 3社、最大8社(無名含む)の神社が置かれているが、これは如何に解釈したらいいのだろうか。小山町長、はじめ役場の関係者、議会議長等の話を総合すると、現在の地区は、幕藩体制時代等の村が合併したものであるため、各々の村や部落に村の守護神としての神社が置かれていたと考えるべきだろうということだ。

伊奈半左衛門(「富士紀行6号:須走復興の陰に義挙あり」を参照)を祀った伊奈神社は、須走の他に吉久保地区にある。

稲荷神は、職業神の一種で、鑪師、鋳物師、鍛冶屋の神として信仰を集めているが、小山地区、竹之下地区にそれぞれ一社があり、該地区の産業が伺われる。同じく、江戸時代に大黒天、弁財天と共に三天と称され、蓄財と福德の神でもあり、商工業者に広く信仰された摩利支天(摩利支天は、軍神、武士の守護神としても信仰された)社が一色地区に、一色地区は商工業が盛んだっただろう。

柳島地区には、沼子弁財天がある。弁財天は、古代インドの大河の偉大さを神格化した

豊饒の神、そして、言語、音楽、学芸の神になった神であるが、江戸時代には弁財天として蓄財の神として広く信仰され、水神としての神格を備えることから池や水辺に祀られることが多い。

小山町内の神社で最も多いのが、八幡信仰に基づく神社であり、八幡神社、八幡宮、若宮八幡神社、八幡宮角取神社等六社がある。八幡信仰は宇佐の宇佐神宮（八幡宮）に起こり、日本で最も広く普及神社信仰である。応神天皇、神功皇后が神格化され王城鎮護の神と崇められ、また清和源氏の氏神としても崇敬された。各地の八幡神社は、勧請されたものであり、全国に八幡宮に関係する神社は四万余社と言われている。

神明社、神明宮とも言われる天照大神または伊勢内外宮の神をまつた神社が3社ある。伊勢神宮参詣が流行するようになると、僻遠の地にも神明社が祀られる。現在では各地の鎮守社境内に摂社・末社として、神明社が於かされている。

阿多野地区と大湖田地区には天神様が祀られている。903年（延喜3）に九州の太宰府で死んだ菅原道真の怨霊を鎮めまつる信仰もいわゆる御霊信仰や雷神信仰と結びつきながら天神信仰として発達し、全国に天神社を生んだと言われているが、これもそうであろう。御霊信仰というのは、個人や社会にたたり、災禍をもたらす死者（亡者）の霊魂（怨霊）の働きを鎮め慰めることによって、その威力を借りて、たたり・災禍を避けようとする信仰である。御霊信仰は田の神や水の神の機能とも融合しあって農村社会に浸透した。

一色地区には天王社がある。天王信仰というのは、牛頭天王（こずてんのう））に対する信仰であり、一説には行疫神（こうえきしん）であり、祇園精舎の守護神でもある。日本に伝来した後は、素戔嗚（すさのお）尊と習合し、高天原から追放された素戔嗚尊が、海を渡り新羅についた後、牛頭方という土地に住みつき、牛頭天王と名乗るようになったとの縁起もある。各地の地方都市に、疫病退散の意味を持った天王信仰が伝搬すると、何れも旧暦6月15日前後を祭日とした祓いの行事として定着し、同時に京都の祇園祭の華やかな風流の形式も取り入れられ、観光的な夏祭りに引き継がれている。一色地区天王社の夏祭りはどのようなものであろうか。

春日山を神山とする春日神社、山の神や水の神を祭神とする山神社（山之神社）が4社、水神社が1社ある。山神社が多いのは、当地がどちらかというと山の民が多く住む所だからであろう。山の神は、春になると降りてきて田の神になり、秋には山に帰って山の神になると言う去来信仰が特色である。炭焼きに従事する弘法大師を山の神として祀るところが多い。山の神は全国的には女神とされている。東日本から中部日本にかけては、山の神を十二様とも言って一年に十二人の子供を産むと伝えており、山の豊饒性を山の神の多産

性として象徴化している。妻のことを山の神と云うのはこのことからであろう。